

面接者の意図と語り手の推測の関係が語りに及ぼす影響 —不登校経験がもたらしたことについての語りから—

欠端千尋

本研究はあまり検討されていなかった心理面接関係ではない関係性における面接で、面接者の意図と語り手が推測する面接者の意図にズレがあったとしても面接に対する評価は下がらないのかどうか、ズレがあって面接に対する評価が下がるとき、下がらないときは何が違うのかについて検討することを目的とした。

研究参加者（語り手）の10名に「不登校経験がもたらしたこと」を語る面接を各30分程度行った後、録音された語りをもとに、面接者は面接者の発言の意図、語り手は面接者の発言の推測（受け止め）について各々独立に記述し、また面接者の発言が面接で役立ったかどうかを9段階で評価した。面接者と語り手が一致して評価を行うことのできた220箇所を分析の対象とした。面接者の意図と語り手の受け止めが一致しているか否かの判定は研究協力者1名を加えた2名で行い、2名の判定が異なった場合は方針を決めて判断した。数値化した評価点については統計的分析を行い、記述された評価については質的統合法を援用して分析した。

分析の結果、面接者の意図と語り手の受け止めのズレの有無によって、面接者の発言に対する語り手の評価に明確な影響があるとは言えなかった。一方、面接者は、語り手の応答が意図とズレていると感じると、発言の評価を下げることを示唆された。また、心理面接研究においては、クライアントはセラピストの意図を忖度して応じるため両者のズレは生じにくいとされているが、本研究では面接者と語り手のズレは生じていた。しかし、ズレにより面接者の発言が役立たなかったと低評価される場合もあったが、役立ったという評価に結びつくこともあることが明らかとなった。ただし、役立った・役立たなかったかを分ける要因については、面接における両者の関係性や語り手が感じた面接者の態度が関与している可能性を示唆したものの明確にすることはできなかった。

難聴児・者に快適な聞こえを提供するための補聴機器に関する基礎研究

上澤梨紗

補聴機器の主な目的は音声言語の聞き取りにあるが、語音明瞭度が改善したとしても補聴器装用児・者とその音質に満足して使用しているとは限らない。難聴児・者の補聴器装用時の満足度を高め、快適な音環境を実現するには、ことばの聞き取りに加えて、環境音に対する快適さや好みを考慮した評価を行う必要がある。そこで、我々は自動環境適応機能または音楽プログラムを搭載した補聴器を対象に音楽による印象評価実験と語音明瞭度検査を行った。また、人工内耳または補聴器を装用している難聴児童・生徒を対象に質問紙調査を行い、学校生活における聞こえについても検討することとした。

印象評価の結果、各補聴器の評価は音楽ジャンルによって異なり、音楽による印象評価では複数ジャンルの楽曲を使用する必要があると考えられた。また、各メーカーの補聴器には得意とする音楽ジャンルが存在した。

一方で、各補聴器の印象評価結果と語音明瞭度および単語理解度は必ずしも一致しない傾向にあった。加えて、音楽プログラムと音声プログラムは自動環境適応機能よりも有効であることを確認できた。なお、本実験における評価は健聴成人によるものであるが、個々の難聴者の音の好みと対応させることにより、難聴者が補聴器を選択する際の有効な基礎資料になるものと考えられた。そこで、難聴者の音の好みに関する評価方法や、個々の難聴者と健聴成人による音の好みの対応関係について、更なる検討を行う必要がある。

また、質問紙調査の結果、難聴児童・生徒は在籍校・学級問わず一定の困り感を抱えており、人工内耳や補聴器の装用だけでは聞こえの限界があることがわかった。しかし、補聴器支援機器の導入や学校、医療機関や福祉機関間の連携により、難聴児童・生徒の困り感・配慮を改善できる可能性があると考えられた。ただし、本調査ではサンプル数が少なく、一部統計的処理が行えなかったため、今後はさらに多くの難聴児童・生徒を対象に調査を実施する必要がある。